長宝寺〔大将軍の西にあり。本尊十一面観音は菅神の御作にて、立像五尺許。洛陽観音巡の第廿九番なり〕

東光寺〔西京御前通下の森の南にあり。浄土宗知恩院に属す〕本尊阿弥陀仏〔安阿弥陀の作、立像一尺二寸。京極西方寺の法誉上人此寺に来て中興し給ふ。其頃豊臣秀吉公の愛妾松丸殿、法誉上人に帰依し、秀吉公戦場に赴き給ふ時必ず笈の中に携へ給ふ故に、陣仏と称する霊尊を寄附し、菩提の因とし給ふ。それより当寺の本尊として軍戦勝利如来とも称す〕

法華寺〔同町にあり。法華宗武州池上本門寺に属す。古へ日像上人説法し給ふ所なり。正和二年宗門興隆の為一七日の説法に、貴賤群集して市の如し。こゝに近衛関白経忠公の息男出家し給ひ、嵯峨大覚寺に住したまふ、其徒弟智覚正覚祐存の三人を具して、京師に至り北野を過り給ふに、かの群詣に驚きて即法筵に連り聴聞ある。忽経宗に信伏して日像上人にまみへ、師弟の約をなし給ふ、大覚大僧正是なり。其後寺を草創し法華堂となづく。年経て兵火の為に焦土となり荒廃に及ぶ。近年宗徒を勧て今の如く再建す〕

超円寺〔同街法華寺の南に隣る、浄土宗百万遍に属す〕本尊阿弥陀仏〔恵心の作、立像三尺許〕観世音　跡追地蔵〔二尊共に恵心の作、表の方小堂に安置す。古へ江州堅田に山門の別院ありしが、元亀二年織田信長山門の大衆と合戦の時、蓮阿弥といふ僧兵火に滅ん事を歎き、観世音を笈の中に負て此地に来り安置す。其頃地蔵尊は跡に残りて、堅田の農民新左衛門といふものに夢中に告て宣ふ、われも都に出て観世音とともに群類を済度せんと命じ給ふ。それより笈に籠奉りて京師に至り、此所に観世音と同座す、故に跡追地蔵尊と称す〕

普門寺〔同街東側にあり、禅宗、世に映山紅寺といふ〕本尊聖観音〔赤栴檀にして毘首羯摩天の作、坐像一尺六寸、南都西京招提寺の開基鑑真上人唐土より将来の霊尊なり〕

帝釈天〔寺内に安置す、弘法大師の作、初は丹州帝釈山にあり、後世こゝに遷なり〕

〔当寺の庭中には映山紅躑躅を数株樹て木の長丈におよぶもの多し、弥生の花盛りには錦繡の林をなし、紅の連山に潅ぐがごとし、都下の人々其紅艶を賞してこゝに群来る、故に映山紅寺と呼ぶ。それ映山紅は紅躑躅なり、杜鵑花に類して小く紅色濃く、三月に花開て能満山に映ず、字義こゝに起る。大小の二種あり、小映山紅は開花繁くして枝葉を蔽す、愛するに堪たり、又白花紫花八重千重の数品あり、大抵は二三尺高きは一丈二丈に至るを珍とす。九州薩摩日向の山谷に多し、かの地に霧島嶽といふあり〕

大聖山西光院〔西京御前通の東三軒町にあり、此街旧名は仁和寺街道といふ。宗旨は浄土律常行念仏の浄刹なり、門前に大界外相の標石を建る〕

本尊阿弥陀仏〔金銅仏にて坐像七尺〕開基西隠上人、俗姓は近衛殿下の家臣なり。延宝二年に官を辞して出家得脱し、諸国を巡行する事凡て五ケ年、厥后都に帰り弥陀尊を造立し精舎をいとなまん事を願ふ。こゝに慶長の頃、方広寺大仏殿の銅像を木仏に改められんとて炉に入れし時、仏像の母指形鋳蕩ずして尚元の如し、諸人奇異なりとして妙法院に蔵む。西隠上人の仏像造立の事を聞召及ばれ、其母指を賜ふ。即鎔範に入て鋳に、忽相好円満の仏像成就す。延宝八年三月廿五日浄華院晃蓮社上人をして開眼ある、当院の本尊是なり。近衛殿下大円満院良材を寄附ありて速に創建ある、今の精舎是なり。〔因に曰、大仏殿銅像の御首を以て洛北西加茂霊鑑寺の鐘を鋳る事は前編に見へたり。西隠上人の入寂は享保九年七月九日なり〕

人麿石像〔当院仏殿の後堂に安置す、坐像二尺許、厨子に蔵む〕享保六年弥生十八日の暁に、当院の門前に藁苞なるものあり、其時所の人々寄集りこれをひらき見れば此像あり。石にもあらず木にもあらず、樟の石になりたるやうになん見へて、体は首に烏帽子を冠り、右の膝を立給ひて、画にかける人丸の如し。いづくよりか捨置けんとて人々不審をなし、当院の門前なれば此寺に安置す。世の人これより人丸寺と呼ぶ。其後冷泉為村卿入道し給ひ、澄覚と名乗らせ給

ふが、此情頭を聞召れ、本尊の由縁人麿の像の事みづから具に記し給ひ、後に六字の名号を首に冠らせて、六首の和歌を詠、共に筆を染給ひ一軸とし当院に蔵め給ふ。